

詩人ロバート・バーンズの「オールド・ ラング・サイン」をめぐって

富田 光行

「×××」の歌に送られ、学舎を巣立って……
……と言ったら、殆ど誰もがすぐ思い出す「××
×」である。これはその原作地に於ては言うまで
もなく、世界の各国でも、船出の時、同級会の
時、親睦会の時、閉会に臨み、別離の哀愁・再会
の希望を表わして、「気の利いた連中」ならば、
恐らく必ずや歌うものである。そして、この歌こ
そは実にかの日本版では「螢の光」と称されるも
のである。

さて、日本では、この歌が明治十四年(1881年)
11月文部省音楽取調係の転用となり、歌詞は同係
に関係あった稲垣千穎、加部巖夫、里見義らの中
で、誰かによって、初め「螢」という表題のもと
に、小学校唱歌として公認され、広く全国津々浦
々で歌い出されて、今日に至っている。

憶えば、この歌は凡そ65年前、私は小学校の講
堂で、厳粛な空気の中に、その荘重優美なメロデ
ィーに魅せられて、一年生として、その作者が誰
人であるかも知らずに、小さな口を一杯に開き、
目には涙を湛え、胸をつまらせ、唯わなわたと、
これを歌って、今日を限りに去り行く卒業生を送
り出したものである。

この歌の作詩作曲はスコットランド最大の詩人
ロバート・バーンズ(Robert Burns: 1759—1786)
によるものと言われているが、作成の経緯・内
容・その他については、後に述べることとするが、
歌曲とその心持とに於ては同じであっても、日本
版「螢の光」とは凡そ程遠いものである。それ故
に、また日本ではこの歌がその歌詞の然らしむ
ところによって、ただ卒業式だけにしか歌われ
ず、従って、その他の機会や季節やに歌うと、た
といそれが原語でにせよ、聞く周囲からは実に異
様に受け取られることが残念恥辱であり、また原

作の詩人に対しても遺憾恐縮の感浅からぬもの
がある。それは兎も角として、「螢の光」が明治十四
年以降・実に100年近くもの間、日本に於て歌い
つづけられて来ていることは不思議といえば不思議
でならないではないか。

さて、私が今時「螢の光」でもあるまいに、敢
えて、「オールド・ラング・サインをめぐって」
と題し、筆を起す気になったのには内外公私(?)
共に、必ずしも故なきにあらずである。昭和三十
三年(1958年)五月三十一日、私はかの民謡「ア
ンニー・ローリー」の中に出て来る女主人公アン
ニー・ローリー(Annie Laurie: 1714—1746)の
史実を求めて、当時スコットランド・ダムフリース
(Dumfries, Scotland: イングランドとスコ
ットランドとの国境にある都市)の市長 G・J・Mc
Dowall 閣下にその史料を乞うたところ、同年七月
二十一日到着で、親切な書簡と詳細な史料とを
送与され、またその年末には、来年(1959年)一
月二十五日はロバート・バーンズの誕生二百年祭
がダムフリース市で行われるから馳せ参ぜよとの
招待を忝うしたが、時間も旅費も意の如くにはな
らず、また学年末で他人に授業もたのめないし、
また今日のように、旅券も「おい、それ」と入手
できる状態ではなかったもので、年が明けて、一
月十日頃に、市長とダムフリースの市民各位とに、
それぞれ祝賀のメッセージを送って満足せねばな
らなかった。

然し、この時から私は本格的にバーンズの研究
に意を決し、由来すでに二十年は過ぎて今日に至
っているが、その間、昭和三十七年(1962年)九月
十六日、当時長野県(中学校高等学校)英語研究会
の会長をして居られた三輪誠一先生(現在、長野
大学学部長)から、「何か、やれ」との大命降下があ

り、そのご厚意に感激して、松本深志高等学校講堂で四十五分間（10：10—10：55）にわたって、「ロバート・バーンズの生涯と作品と」と題して、ささやかな講話をさせていただいたのである。

人間は自己の言葉を忠実に守り、他者の恩義を終生忘れずに貫徹したいものである——人間能力の限界に於て。そこで、私は昨年（1976年）一月から、過去二十年間にわたるささやかな研究(?)をまとめて、ダムフリースの市長閣下を初めとして、恩人、知人等に、「一つにまとまったもの」を報恩の記念までに謹呈しようと考え、自費出版を計画し、日英両文もの (bilingual) で、目下——校正・再読・種々様々な雑務に追われているのだが、偶々本学に於て、非常勤講師も紀要の紙面を汚してもよろしいとのご厚志を承ったもので、浅学薄識をも省ず、年の功で「恥の上塗」をすることになるであろうことを前以て申し上げて、筆をつづけることにしよう。

さて、私が何故に、「オールド・ラング・サイン」を特に取り上げてみたいと思うのかは、以上の経緯からも若干のご想像は願えると思うが、積極的には、この「オールド・ラング・サイン」が、

(1) ロバート・バーンズというユニークな人間味あふれる人物によって、日々の農耕に疲労した肉体に鞭打って、ミューズの女神に導かれて作成した数百に上る詩歌の中で、特に社会生活の生成発展に必要な条件たる「友情」を歌い込み、またそのメロディーはスコットランド特有の哀愁・甘美・勇壮等々数え上げれば切りがないものに富んでいることである。

私はその由って来る底流を掘り当てたい。

(2) そのような歌ではあるが、日本の英文学者中・某氏はそれをいわば、「一寸拝借物」と評し、バーンズの原作ではないと定めつけているものがあつたように思い出されるが、この辺のことは実のところ、祖国スコットランドでさえも、その純粋性について、とやかく詮議沙汰になった時代もあるような訳で、この辺を少し探って明かにしたい。多少物好きな人間があつてもよいのではないか。尚、一昨年二月か三月かの頃、NHKによる英語講座で某講師がオールド・ラング・サインの

所を説明しているのので、私は興味を感じて、聴き入っていると、講師は Auld Lang Syne の Syne をザインと、イングリッシュ読み(?) になさり、第一韻節と第五韻節とに出て来る kindness というのを「親切」と訳しておられたので、これは困ったことになったぞと思った私はその訂正方を局の係へ葉書で申し入れたが反響は全くなかった。kindness はスコティッシュで、イングリッシュの affection (愛情) に当るものである。こんな風で、大物大作になると、どういふ訳か気が緩んで、いい加減になって、誰も敢えて取り上げないで通るといふ場合がよくある。文脈の前後関係から考えたって、親切とは少々無理になるだろう。

(3) かくまでも有名な詩歌であつて見れば、韻律法の立場からも少しく眺めてみたいし、またその歌い方も知っておきたい。

昭和三十四年（1959年）五月十日、遠来の友・ダムフリースのフランシス・ケリー氏が私を訪問された時、氏を中心にして、二国の友好を祝し、家族一同でこの歌をうたつたのであるが、その時その歌い方も教えられて以降、バーンズを語る人と会う毎に、その歌い方なども伝授して、当時を追憶している。

(4) その資料として、私がこれまで使用したものの一部を挙げると、

- ① Robert Burns : Poems and Songs (584頁)
by Professor James Kinsley, M. A.,
PH. D.
- ② Life and Works of Robert Burns (4巻—
1320頁)
by Robert Chambers
- ③ Robert Burns : The man, his work, the
legend (291頁)
by Maurice Lindsay
- ④ The Love Songs and Heroines of Robert
Burns (155頁)
by Rev. John C. Hill, M. A.
- ⑤ The Scottish Tradition in Literature
(352頁)
by Kurt Wittig
- ⑥ The Scottish People: Their Clans, Famil-

ies, and Origins (351頁)

by James Alan Bennie

⑦ The Burus Encyclopaedia (287頁)

by Maurice Lindsay

「神」を中心とした超自然的超人間的な原理(信仰)にもとづく中世一千年の後をうけて、「人」を中心とする近世思想はその原理として自然(理性)を仰ぎ見ることが欧州全域にわたる一般傾向となっていたが、やはりその間に特殊な傾向も餘蘊をば尚くすぶらせ、暫らくは信仰と理性・天国と自然・意志と感情という二律背反的な風潮がつづく中に——こういう現象は実のところ、何時にても、何処にても、また何人にも、多かれ少かれあるものだが——同世紀の後半が訪れる。避けんと望みながらにも、ついに避けることの出来ぬ自然に於ける矛盾に悩む第十八世紀の neo-classicism に身をもって、その昇華剤を投じてくれる偉人が必要である。二律背反の風は東に西に、左に右に、吹きつづけては止もうとはしない。偉人を待つこと、すでに久しい。

千七百五十九年(わが宝暦九己卯年)一月二十五日、かような状況下に、雪深く埋もれたスコットランド西南部・クライド湾に流れ入る Doon 河の河口に近い東西二哩の寒村アロウェー(Alloway)の粘土「小屋」(biggin)で、かの英国最大の詩人バーンズ(幼名はロビン Robin)が呱呱の声を上げた。時に父 William 三十八才、母 Agnes 二十七才であった。

祖父 Robert Burnes (e がついている)が意を決して移住の地と定めたこの地方はたとい今日スコットランドで最も肥沃で経済的によく均衡の取れた地方の一つであっても、当時としては彼の出て来たところの Kincardineshire にも劣らず、遅れている地方であった。

祖父 Robert をこの地方へ追いやった第一の理由は当時一般に農民達が地主の土地を小作する短期間の組織であった。小作の土地を改良する資金を持っている農民はその貸借期間が改新される時、次の借賃が上げられることに気がつくことがよくあった。というのは、そうすることによって、地主はその土地の価値がその度毎に増加されて行くからである。この故に、小百姓達は不毛の土地とは知りつつも、低地代で入手出来る土地か

ら土地へと、餘儀なく移り変って行かねばならなかった。さればこそ、幾代長く住み慣れた故郷といえども、時代の推移・事情の転遷に抵抗し難く、すでに胸中深く西南地方開拓の夢が秘められていたのが、まさに祖父 Robert であった。

さて、Kincardineshire に住む若い時代から祖父は祖国スコットランドの独立存在を悲願する熱烈なる Jacobites の一人であった。千七百十四年(わが正徳甲午四年)に Stuarts 家復興を目指す Bolingbroke の計画は Anne (1665—1714年)女王の死によって、箔がついたけれども、George 一世(1660—1727年)の王位継承(1714年)、「十五年」として知られている拙劣極まる蜂起(1715—1716年)[わが正徳乙未五一六年]は遂に大失敗に終わった。スコットランドの独立を悲願して、この運動に東奔西走した憂国の闘士・祖父 Robert も無念悲壯、その結果失職し、スコットランド南西部に横わる Marshal 伯爵の所有地 Dunnottar 教区の静かに流れる Doon 川のほとり Clochnahill の農場を借り受け、耕作の生活に再出発し、教区の Criggie に住む小作人 Alexander Keith の娘 Isabella と結婚し、千七百十七年(わが享保丁酉二年)には長男 James、千七百十九年(わが享保己亥四年)には次男 Robert (自分と同名)、そして千七百二十一年(わが享保辛丑六年)十一月十一日には三男の William が生れた。この William こそは、実に詩人バーンズの父その人であった。

千七百四十年(William 十九才：わが元文庚甲五年)に、不作・低物価・凄惨な霜害等に見舞われ、その後苦節五年の歳月が流れて、ついに千七百四十五年(わが延享乙丑二年)に、この農場を放棄してしまった。尚、その上に、幾多の失意が去来し、彼は一家を挙げて Dunnottar (Aberdeen の南西15哩、Kincardineshire の教区)へと転出して行くのであった。

William は父 Robert が Marishal 伯爵によって、Aberdeenshire なる Invergie 城の造園師として雇われたことがあったので、自分も造園師として訓練された。そして、千七百四十八年(わが寛延戊辰元年)に William は自分が「非常に性行優秀なる青年」であることを証明する一種の文書を Kincardineshire の領土三名から入手することが有利であると考えた。然し、この年、それまで農夫と

して色々な大望を抱いていた父 Robert は千七百四十九年（わが寛延己巳二年）に再出発した Jacobites の蜂起によつて打撃を受けて破産し、家庭は瓦解してしまつた。そこで、William はこの証明書を携えて、Edinburgh（スコットランドの首都）へと赴いた。それというのも、当時 Edinburgh は幾人かの造園師を必要としていたからである。

William は二年間首都附の造園に雇われ、その仕事は一部かの「牧場」で行われた。それから、千七百五十年（29才：わが寛延庚午三年）に西方の地 Ayrshire へと移住し、先ず Fairlee 領土のため、次に Doonside の Crawford 家のために働いた。然し、彼は養樹園主として独立する希望を抱き Ayr（Ayrshir の港都）の Dr. Alexander Campbell から Alloway に7エーカー半の土地を借り受けた。然し、このような方面だけで生活することは出来なかつたので、かの引退医師で、Ayr の市長 William Fergusson の所有地 Doonholm で造園主任として採用されることになった。

千七百五十七年（わが宝暦丁丑七年）の夏から秋にかけて、William は Alloway の養樹園地に、「二部屋だけの小屋」（biggin=but and ben）を建てた。彼の胸は自信と希望とに膨れるのであった。そして、その年も暮れようとする十二月十五日に Kircosward 教区（Ayr の南方 Carric 内にある）Graigenton 農場に住む小作人 Gilbert Brown の長女 Agnes を妻として迎えたのである。この年、William は三十六才、Agnes は二十五才であった。

Agnes はこれより前千七百三十二年（わが享保壬子十七年）・十才の時、母に死なれ、弟妹五人の母代りに二年間、家庭の世話をす。父（Robert）の再婚で、Maybole に住む祖母 Rennie 夫人の所へ身を寄せることになった。この夫人はかの聖約同盟時代（1580年：わが天正庚辰八年）に発生した事件を回顧し、その心には祖国スコットランドの古歌や民謡やで満ちあふれていた。

後に、バーンズの妹 Begg 夫人（旧 Isabella Burns：1771—1858年）の書いたところによると、Agnes は身長が平均以下で、デブ型に近いが、きちんとして格好がよく、且つエネルギーで、血色はよく、いわゆる桜色をし、立派な角

額で、髪は淡赤であるが、眉毛は黒く、その黒い眼は時折制し切れない気質をもつて輝いていた。その性格は快活で、その物腰は軽やかで且つ落ちついたものであった。その応待ぶりはアッサリで且つ控え目であった。その判断力は非凡で且つ健全妥当であった。

千七百五十九年（わが宝暦己卯九年）一月二十五日に、バーンズは前述の如くに、この biggin で呱呱の声をあげたのであるが、生後九日か十日たった頃、夜来の暴風はいよいよ激しさを増して行く。産褥に横わる Agnes はその吼声を聞く度毎に身を縮め、ロビン（バーンズの幼名）をしっかりと抱きしめる。黎明が次第に近づいて来る。

突然！ 暴風は一段と勢力を増し、ついに茅屋の切妻その他を吹き飛ばしてしまつた。見る見る中に、床といわず壁といわず、あたり一面足の踏み場もなく見るからに恐ろしい姿が展開した。次には他の箇所も崩れ落ちそうである。もはや、これまでと、覚悟をきめた Agnes はロビンをしっかりと抱きかかえ、産後間もない我が身も忘れ、脱兎の如くに外へ飛び出し、隣家の軒下へ駆け込んだ。噫！ 生れて僅か十日ばかりしか経たないロビンに何の罪科があつたというのか。破壊された切妻その他を修理するのに凡そ一週間もかかつてしまつた。

この惨事は実のところロビンの一生を予告して餘すところがなかつたような不思議といえは不思議な事件であつた。バーンズは後になって、その当時を偲んで、「カイルに一人若者生まる」（There was a lad was born in Kyle）と題する皮肉たっぷりな詩を書いている。

Our monarch's hindmost year but ane
(ane=one)
Was five-and-twenty days begun
'Twas then a blast o' Janwar win'
(Janwar=January)
Blew handsel in on Robin.....

王が崩ずる 一年前が
二十五日に 始まつたんだ
ロビンに年玉 くれたのはなあ
その時吹いた 一月の突風

この王は George 二世で1683年11月10日に生れ、1760年10月25日に死んだ。この詩はバーンズが26才の作。

凡そ人間は「貧すれば鈍する」のが常で、真理の探究・善悪の判断・審美の追求などと、気の利いたことが出来るものではない。然し、バーンズにあっては、その型を異にしていた。勤勉で誠実で且つ又情愛にとみ、これに加えて詩情ゆたかな雰囲気の中に、晴耕雨作の姿が気高く見受けられるのであった。然し、それは「我こそ天より遣され、ミューズの女神に導かれ、詩を書き歌を作るものである」との強烈無比なる信念がその胸中深く秘められていたことに起因する。

我々は敘述の過程上、かの苛酷なる耕地貸借制度下に於て如何に悲惨な移住を転々と繰り返して行ったかを取扱わねばならないのであるが、然しその詳細なる状況を描写することは紙面の許すところではないので、バーンズとして、萬止むを得ずその故郷 Alloway から以後五回にわたって求地転住の苦難をつづけた地名だけを列挙すれば、

Oliphant : Alloway の東南二哩に横わり、一般

に Mount Oliphant とよばれる地

Lochlea : Ayr の北東10哩にある Mauchline と Tarbolton との間に横わる湿地

Mossgiel : Lochlea の南東凡そ二哩にあり、かなり荒蕪の地

Ellisland : Dumfries から六哩の Nith 河畔にあって、Glasgow への沿線に横わる地

Dumfries : England と Scotland とを分つ Solway Firth に沿う都市（今日では民謡「アンニー・ローリー」に出て来る Maxwellton の丘も、その一部となっている。）

その間、彼は農耕の苦痛疲労と戦い乍らも作詩作曲に専心し、その詩集は Poems, Chiefly in Scottish Dialect と銘を打って、千七百八十六年（わが天明丙午六年）七月三十一日に、Kilmarnock (Edinburgh の南西凡そ八十哩、Ayr の西凡そ二十哩の地) から発行したが、それは Edinburgh の文壇でばかりではなく、また一流の社交界でも——空前絶後の歓迎を受け、並み居る紳士淑女達をいやというほど、呻らせてしまった。

というのは、バーンズが千七百六十八年（わが

Auld Lang Syne

(1) Shoud auld acquaintance be forgot
And never brought to mind

明和戊子五年) 十一月二十八日の夜、Edinburgh の有力者・文学者・社交会・貴夫人達の前に現われたとき、彼の風貌・表情・話術・等々に彼ら彼女らは圧倒され、これまで「無学の百姓詩人」がと聞いていたのとは全く勝手がちがって、ミューズの女神が遣わした「天来の詩人」を目のあたりに眺めたからである。それだけならばよいが、彼の魅力に惹きつけられた貴夫人達は、ついに我慢も出来なくなって、彼女達の方が「誘いを掛ける」場面も生じたほどである。

ここで、然らばそのように魅力百パーセントなバーンズは、観相学上また骨相学上どんなものであったかを述べて、本論に入ることにしよう。まず、彼は身長凡そ五フィート・十インチで、肥満の撫肩は容姿の自然な均斉と優雅とを装い、二重のつぶらな眼は非凡なまでに人の興味を惹く甘さと深さとを奥に湛えさせ、かといえど亦近づくべからざる高邁と冷厳とが身に薫り、ただ彼の側にいるだけで、いつしか恍惚の境地へと没入してしまふとは、驚く勿れ、時の Gordon 伯爵夫人 Jane (1749—1812) や Mrs Walter Riddle (1764—1802) やの告白であった。

さて、我々がこれまで伏せておいた Auld Lang Syne について、いよいよ考察することにしよう。この詩歌が作成されたのは千七百八十八年（わが天明戊申八年）の秋某日、スコットランドの南部 Ellisland の農場で、乾草場に仰向けになって、限りなく高い蒼窮を眺め、時折去来する小さな雲を見て、遠くはなれた竹馬の友を思い出し、感激こめて綴ったのがこの詩歌である。この頃、作詩作曲がその高潮に達しているバーンズは 齢二十九才となっている。これは、哀歎の音調極まりない幾多スコットランドの詩歌中でこれこそは「友情」の詩人バーンズに於ける稔り豊かな人間性を知る上に最も貴重な資料であると言えるものである。

まず、我々はそれを原語と邦語と対照させて、下に掲げて、それについての歴史上・韻律上・若干の問題にふれてみることにしよう。（尚、私はそのまま原型メロディで歌えるように、邦語で翻案を試みた。乞う——ご試唱を！）

なつかしの 幾とせ
むかしの友 忘るべき
心にとどめ おかずして

Should auld acquaintance be forgot,
And days o' lang syne?
chorus.

For auld lang syne, my dear,
For auld lang syne.

(2) We twa hae run about the braes,
And pu'd the gowans fine;
But we've wandered mony a weary foot,
Sin' auld lang syne.

(3) We twa hae paid't i' the burn,
Frae mornin' sun till dine;
But seas between us braid hae roar'd,
Sin' auld lang syne.

(4) And here's a hand, my trusty fiere,
And gie's a hand o' thine;
And we'll tak a right guid willie-waught,
For auld lang syne.

(5) And surely ye'll be your pint-stoup,
And surely I'll be mine;
And we'll tak a cup o' kindness yet
For auld lang syne.

上掲の詩歌について、世上ただその原作国スコットランドは言うまでもなく、日本でも、そのバーンズに於ける創作性に甲論乙駁を生じた時代がある。①或る者はその創作性を全部否定し、バーンズはスコットランドの古歌——古民謡を一寸拝借したものに過ぎないとか、②或る者はその一部を同国古来のものから変用したものであるとか、③バーンズを尊敬する餘り、この詩歌を全部彼の原作とする——或いは、しようとするもの、などである。そこで、我々はこの辺を明らかにすべく少しく順を追って探ることにしよう。如何なる解答に辿りつくことであろうか。

千八百二十三年（わが文政癸未六年）、Sir Walter Scott (1771—1832) によって創立された Bannatyne Club 所蔵の史料中、Bannatyne Manuscript (1568年の部) に匿名の作者による民謡 Auld Kyndnes foryett と題するものがあって、これは

むかしの友は 忘るべき
遠き昔も 忘るべき
合唱

友よ過ぎにし 昔をば
過ぎし昔を なつかしみ

二人は丘を かけまわり
うるわしの菊 摘みたれど
長くさまよい 足つかる
幾とせ過ぎて 今にまで
二人小川を 涉れども
朝日さすより 日暮れまで
海は二人を 割ききて泣く
幾とせ過ぎて 今にまで

まことの友よ 手はここに
君もさしのべ その手をば
我ら飲まずや なみなみと
遠き昔を なつかしみ

たしかに君は 君の分ぶん
たしかに我は 我の分ぶん
他日いつか交わさん 友情ともの酒杯
遠き昔を なつかしみ

「人間の忘恩」に対する作者匿名の老詩人による不満を晴らすものであるが、八箇の韻節からなる最後の韻節の最後の詩行は次の如くになっている。

And auld kyndness is quyrt foryett.

ところで、この詩行が Should auld acquaintance be forgot と構文に於て——また韻律に於て若干の類似があるところから、物議がかもし出されることになった。

千七百十一年（わが正徳辛卯元年）、第十八世の Scott Revival が全的に依存している Watson の Scots Poems に於て初めて公表される Aytoun (Sir Robert : 1570—1638) の詩は次の如く始まる。

“Shoud auld acquaintance be forgot
And never thought upon,
The flames of love extinguished,
And freely past and gone?”

Is thy kind heart now grown so cold
In that loving breast of thine,
That thou canst never once reflect
On old-long-syne?"

ここで、我々は初めて、第一詩行に全部を第八詩行に一部を、バーンズの創作性との関係に於て注目すべきものと感ずる。

Henley (William Ernest : 1849—1903) と Henderson (Thomas F. : 1896—?) とは第十七世紀の終から始まり次のような折返のある street song に言及している。

"On old long syne
On old long syne, my jo,
On old long syne:
That thou canst never once reflect
On old long syne."

Ramsay (Allan : 1686—1758) がその曲に合わせて書き、かの Museum の中に解説附で印刷された歌は千七百二十年 (わが享保庚子五年) に、彼の Scots Songs の中で公開された。

"Should auld acquaintance be forgot,
Tho' they return with scars?
These are the noble hero's lot,
Obtain'd in glorious wars:
Welcome, my Varo, to my breast,
Thy arms about me twine.
And make me once again as blest,
As I was lang syne."

ここでも、第一詩行は全部、第八詩行は一部、現行のものとは一致している。

尚、これらの他に、当時に於ける二篇の政治的な民謡があって、その "echo" がバーンズの版に響いているところの "turns of phrase" (楽句の回音) を示すものである。そして、かの The Old Minister's Song の中では、その作品 Tullochgorum で、Skinner (John : 1744—1816) 師は大抵のものより一層近づいている。

"Should auld acquaintance be forgot,
Or friendship e'er grow cauld?
Should we nae tighter draw the knot

Aye as we're growing auld?

How comes it, then, my worthy friend,
Wha used to be sae kin',
We dinna for ilk ither spier
As we did lang syne?"

さて、バーンズはこれらより古い詩を実際に知っていたであろうか。恐らく、たしかに知っていたであろう。

千八百九年 (わが文化己巳六年) に、Cromeck (1770—1812) はバーンズに関する史料を蒐集すべくスコットランドへ赴いた。そして、同年に彼は Reliques of Burns, consisting of Original Letters, Poems and Critical Observations on Scottish Songs

を刊行し、この中でその史料を公開した。ところが、それは彼 (バーンズ) による偽物であるとして長い間うたがわれていたものが、1922年 (わが大正壬戌十一年) にバーンズ自身の手になる原稿が発見されて、その大部分がバーンズの原作で、したがってそれが特に貴重なものとなった。彼はその最も優秀なる二韻節 (第二と第三と) がバーンズの特に純粹原作によるものであるとの証拠を強調した。

歴史の定説が確立されるまでは、なかなか安心は出来ない。Museum の第十九世紀初期に関する再発行の編輯者たる William Stenhouse はバーンズが「ただ三箇の韻節だけが古く、他の二箇の韻節は彼自身 (バーンズ) によって書かれた」ことを James Johnson に対して認めている。また、千七百九十三年 (わが寛政癸丑九年) 九月に、バーンズは George Thomson に、この歌に関する第三の既知な原稿を幾個かの小さな変化を加えて送り届けているが、その中で最も重大なのは、合唱の中に出る my jo の代りに my dear を入れ替えていることである。添え書の書簡で、バーンズは「もう一つの歌を——Auld Lang Syne を作ってしまっている。その音曲は平凡である。然し、次の歌——昔の古い歌で、決して印刷されたものでなく、また原稿の形にでさえもなっていないものであったが、ついに私がそれを或る老人の歌っているところから書き取ったもので、如何なる音曲にでも托することが出来る」と言っている。

少しく後になって、Auld Lang Syne の写本を James Johnson が持っていることを Stephen Clarke (1797年歿) から George Thomson が知り、そしてその音曲が Ramsay の解説にしたがって、かの Museum の中にすでにあることに気がつき、後に彼はバーンズに宛てて書簡を送る。そして、バーンズは千七百九十四年（わが寛政甲寅六年）十一月に、あなたが Clarke のものであなたが見たそれら二つの歌はそれらの中いずれもあなたの注目を惹く価値のないものです。Auld Lang Syne という言葉はよいものです。然し、その音楽は古いメロディーで、その名称で現代版になっているメロディーの基盤になっているのです。それより他のメロディーをあなたは平凡な Scots の田舎舞踊曲として、お聞きになるかも知れません。」と答えている。

ところで、「それより他のメロディー」とは何であったか。それは恐らく、我々が今日知っているところのもので、そしてそれに対して、Thomson がそれらを「その編輯者が所有する古い原稿からのもの」として主張している Scottish Airs (1799年刊行) にそれらの解説を公表したメロディーであろう。その間に、この歌 (Auld Lang Syne) は大衆的となって行く。Thomson は彼の Select Melodies (1822年) を出版したとき、彼は「編輯者が所有する一写本より」と、その解説を造り直したが、この表現（つまり「古い」を取り去ったところ）の方が少くとも幾分かは正直であった。

かの見なれ聞きなれているメロディーの第一旋律は Apollo's Banquet (1690年刊行) の中で、The Duke of Buccleugh's Tune で現われる。然し、このことはメロディーというものの偶然の一致に関する一個の別な興味ある実例以上の何ものをも立証しないと考えられよう。その common Scots country dance は Miller's Wedding という題目で、Bremner の Scots Reels (1759年刊行) に現われる。その commonnes はそれが次代三十年内に少くとも尚更に五回にわたって同様な出版物の中に現われ、Museum では二回異なる解説附で証明され、また William Shield の ballad-opera Rosina (1783年刊行) で少しく簡潔にされた版で採用されている。

Thomson のそういう解説附の版 (Johnson の版

の方が恐らくよいであろう) はバーンズ詩集の大衆版の中で、通常見受けられる。ところで、両版共に And we'll tak a right gude-willy waught という詩行を入れているが、それは曾て無用の物議をかもし出したところである。

ここに、一つの面白い事件がある。それは千八百五十一年（わが嘉永辛亥四年）[この事件は London Newspaper, March 1851 に掲載されている。] のことであった。アメリカのボストンで開かれたバーンズを記念する祝祭に於て、一人のアイランド人が「彼（具体的な人物は不明）は詩人（バーンズ）を一個のアイランド人と主張した。然し、その企図は空しいものとなるであろう。彼（バーンズ）の叙情詩中で一番よく知られている一つは彼（バーンズ）をすぐにそれと見抜くであろう」と。——

'And surely you'll be your pint-stoup,
And surely I'll be mine!'

そこには、国民的なものとなっている儉約の特異な精神の中に、勘定（書）を、而も尚「君はその pint-stoup（酒杯の容器）の代も支払うべきだ」という条件で、清算するところのバーンズがいる。アイランド人ならば、そのような事は思いつかなかつたであろうに」と。我々はこのアイランド人による発言から二つの事柄を学ぶことが出来たであろう。

Robert Chambers (1800—1883年) によれば、「バーンズは自分の歌について少しく神秘化することに溺れるようになった。彼はここで Auld Lang Syne を一つの古い断片と語りはするけれども、そして後にそれを或る老人からの「歌ふこと」で回復することほど、そんなにまで幸運であったことに自己祝賀の表現をもって George Thomson に伝達はしたけれども、第二と第三との韻節——それらは青春時代の思い出を表すところのもので、また何と優美なこと——は彼自身によるものである。」と。

バーンズが新しい歌に対する基礎としての或る古い民謡に於けるこういう一つの優美な韻節に、偶然出会うという事実は彼が詩作の中に美しくあるところのすべてのものについて彼が持っている適切なセンスを明らかに示しており、また彼の想像力が最もわずかな命令（ミューズの女神による

か)でもあり次第、すぐに発動する用意が出来ていたということも明確に表している。

我々は韻律学上で Burns Stanza と称するものをもっている。それは音楽的には二重になるところのものを組み立てるために、第二、第四、第五、第六の詩行に於てリズムの反復する一つの統一体である。この詩は音楽と共に落ち着いた調子で展開するが、然しその音楽が転昇するところの第五詩行に於て、定型的な言葉が高まって、激情的な宣言をする。第二と第三との韻節に於ける構造統一体の内部に一つの類似した情緒上の変化があり、——そして、それはその歌曲によって示唆され持続される変化である。

我々は特に Burns Stanza と呼ばれるものをもっている。然し、これは純粹に彼の原作ではないとされている。それは例えば彼の詩中に於ける一つ——「山の雛菊に寄す」に於て見られる。

Wee modest, crimson-tippèd flow'r

小さく、内気で 尖の赤い花

Thou's met me in an evil hour;

お前は会ったな 悪い時、俺と

For I maun crush among the stour

土中へ俺はな 砕いて入れなきや

Thy slender stem;

お前の かぼそい その茎を

To spare thee now is past my pow'r

お前をそのまま もうおらせられぬ

Thou bonie gem.

奇麗で可愛い宝石よ

○ — ○ — ○ — ○ — a

○ — ○ — ○ — ○ — a

○ — ○ — ○ — ○ — a

○ — ○ — b

○ — ○ — ○ — ○ — a

○ — ○ — b

上に於て見られるように、最初の三詩行は抑揚格歩の四韻律で、第四詩行は抑揚格歩の二韻律で、第五詩行は抑揚格歩の四韻律で、そして最後

の第六詩行は抑揚格歩の二韻律で作られている。尚、この詩に於て用いられているリズムについて語ると、最初の三詩行と第五詩行とは同じ a (assonantal rhyme—母韻) を、第四詩行は b (consonantal rhyme—母子韻) を、そして最後の第六詩行は b (consonantal rhyme—母子韻) をもっている。

さて、いよいよ主題の Auld Lang Syne について、韻律学上の問題にふれることにしよう。但し、ここでは第一韻節についてのみを論ずることにする——何故ならば、その他四韻節も同じ手法で取扱われているからである。

Should auld acquaintance be forgot

○ — ○ — ○ — ○ — a

And never brought to mind?

○ — ○ — ○ — b

Should auld acquaintance be forgot,

○ — ○ — ○ — a

And days of auld lang syne?

○ — ○ — ○ — b

chorus

For auld lang syne, my dear,

○ — ○ — ○ — x

For auld lang syne,

○ — ○ — a

We'll tak a cup o' kindness yet,

○ — ○ — ○ — x'

For auld lang syne.

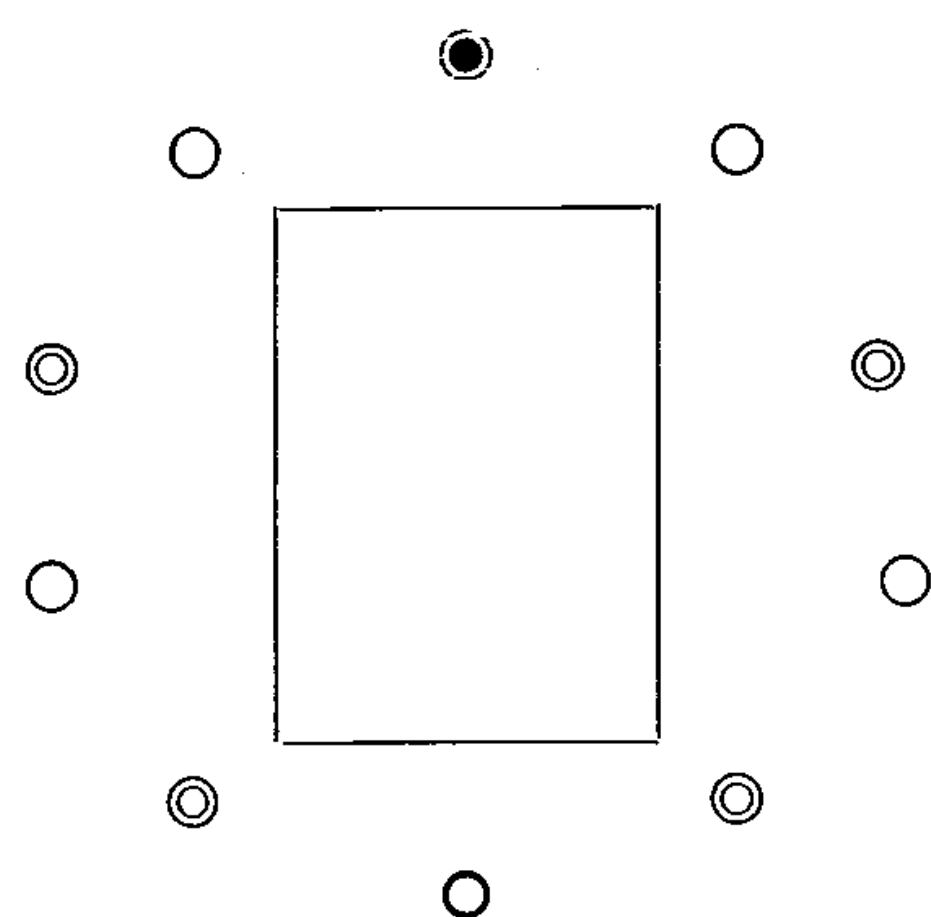
○ — ○ — a

上に掲げたように、第一と第三との詩行は抑揚格歩の四韻律で、第二と第四との詩行は抑揚格歩の三韻律で綴られている。また chorus では、第一詩行が抑揚格歩の三韻律で、第二と第四との詩行は抑揚格歩の二韻律で、第三詩行は抑揚格歩の四韻律で綴られている。尚、各行末の押韻について見ると、第一詩行と第三詩行とでは母子韻となり、第二詩行と第四詩行とでは母韻となっている (mind の d は省音されてもよいであろう)。また chorus に於ては第二詩行と第四詩行とは母韻となり、第一詩行と第三詩行とは一致していない。

ところで、この歌について思い出すことがある。千九百六十二年 (わが昭和壬寅三十七年) 七月、スコットランドの信友、Francis Kelly 氏が私達を訪問され、二週間ほど過され、千曲川が彼の故

郷ダムフリース市街を静かに流れる Nith に似ているというので、千曲橋下から泳ぎ出して、午後ひとときの一時を楽しまれたが、夜となって茶の席で、彼は私達（といっても私だけはだめ）とダンスの一時を過ぎられたが、その間に彼は私達にこの歌の歌い方を教えて下さったことは、なつかしいことで、終生忘れられない。今、ここで、その歌い方をご披露いたしたい。これは英語を話す国へ行って、何かのパーティーでそれが終る際には必ずや歌われることであるから、老若男女に拘らず、覚えておいた方がよいからである。また一つの教養としても、この歌をこの方法で歌えることは奥床しく、それ故に望ましいことである。

図のように、テーブル（型は不定で、またあっても、なくても、よいであろう）があれば、それを囲む。その家（又は会）の主人（男と女と）相對し、円陣を作り、各自（男◎印、女○印）の手



（右手を左へ、左手を右へ曲げ延ばし）を隣にいる人の手とをしっかりと握り合（join crossed hands）って、歌のリズムに合わせて、各自の両手を上下に動かしつつ歌って行く。これは、この場にいる人々の不滅な友情を象徴（symbol of the undying friendship）することである。

この詩歌はその由来について、かように種々なる史料が現われ論議が交わされて今日に至っているが、それにも拘らず、尚且つ広く歌われ、然もバーンズとの関係に於て、いささかの揺ぎもなく愛し続けられているのは畢竟バーンズという一個の特異な存在が作り上げた思想と業績とによる人間像がその中心に巍然として立っているからである。つまり、この詩歌に於けるすべての詩行がバーンズの原作であると言っても、少しの無理抵抗

を感じさせないほどのものである。

千九百五十九年（わが昭和己亥三十四年）一月二十五日、バーンズ誕生二百年祭に当り、Dumfries Burns Club の晩餐会に臨み、「物の言い方」が第二の Shaw (G. B. : 1856—1950) ともいえそうな感じの有名な小説家・劇作家・詩人・政治家たる Sir Alan Herbert は「今から二千年間、もし人類がこの性急に於て取るに足らない惑星上に尚生存しているならば、一日の刻一刻に誰人かがその旋回しつつある月の下で、「昔の友は忘るべき？」を歌いつつあるだろうと言っても、差支えはないであろう」と喝破した。

今や私はこの拙稿を了えることになった。そのためには、背後に大方のご厚意とご支援とがあった。私はここで関係各位に感謝の微意を表したい。(1)まず、このようなパツとしないテーマにも拘らず、紀要の貴重な紙面の末席に罷り坐することの榮譽を得させて下さった長野大学に、(2)そして、二十年間にわたって、次々と貴重な資料と絶大な激励とを寄せて下さったダムフリースの前市長 G・J・McDowall 閣下、博物館長 A・E・Truckell, M. A., 信友 Francis Kelly 氏に、(3)また、私に「進物」と称しては時折バーンズの研究に関する洋書を随時献納(?)してくれた私の学息二人に、(4)それから、昭和四十七(1972)年夏、ダムフリースの Globe Inn (バーンズが常客となっていた酒場) にケンブリヂ大学聴講生として夕陽の暮れる頃立ち寄ったところ、来意を聞いた合客が歓呼の声を上げて招き入れ、語り、笑い、飲み、歌い、踊って、夜を徹する好意を示してくれたダムフリースの方々に、——どうも、ありがとうございました。

私は、このあと、私の拙著 Robert Burns : His Life and His Poems and His Thoughts (ロバート・バーンズの生涯と詩歌と思想と) [日英両文もの——凡そ250頁] の一日も早く出版となるのを願うのみである。

物心共に豊かなれと初秋の夕陽に祈り、
遙かなるスコットランド・ダムフリースの空に
深き想いを馳せつつ

一九七七年九月七日